第631号
喬木村公民館：長野県下伊那郡喬木村6664

発行日　2021年10月15日
発行責任者　喬木村公民館長　市瀬　徹
編集責任者　公民館編集部長　仲田久志
印　　刷　龍共印刷株式会社

秋の風景

日中は日差しが強く、まだまだ夏が抜けきれませんが、周りを見渡せば着実に秋の訪れを感じます。気分転換に近所を歩きながら、皆さんも秋の訪れを五感で感じてみませんか。

秋の日暮れはあっという間です。気が付けば、外は真っ暗!ということもしばしば…1日が何だか早く感じます。

実りの秋、これからはりんごや柿の出番です。おうち時間での楽しみは食べることと言っても過言ではありません!旬の味覚を楽しみましょう!

コスモス（秋桜）もあちこちに咲いていました。

今年は松茸が豊作!久しぶりの松茸に皆さんも舌鼓を打たれたのではないでしょうか。御馳走があると、家族が集まり会話も弾みます。コロナ禍のちょっとした贅沢ですね。

もうすぐ見頃です

秋のお庭を彩る「ドーム菊」。伊久間原ですくすく成長中です。10月16日からは「ドーム菊祭」を開催するとのことです。9名のメンバーのみなさんが丹精込めて作ったドーム菊を見に、皆さん足を運んで見ませんか?（購入もできます!）

刈り取られた田んぼも増えました。毎年、「今年は穫れた」「今年はだめだった」と一喜一憂する季節でもあります。すっかり減ってしまったはざかけも秋の風景の一つです。

椋鳩十ものがたり 72

『椋鳩十全集』掲載作品

椋鳩十顕彰会　久保田　毅

椋鳩十全集十四
「カガミジシ」
昭和四十四年

その二

「しげみにかけこんでいった、犬のなき声もしない。・・・山の中は、しいんとしずまりかえっていた。・・・とつぜん、そのしずけさがやぶられた。・・・」

犬のなき声です。イノシシを見つけた犬たちが、かくれ家から追い出しにかかったのです。

「犬のなき声が、あちこちに移動しはじめた。・・・イノシシが犬に追われて、しげみをにげまわっているのだ。・・・」

狩人たちはイノシシのすがたが見えなくても、犬のなきかたによって、イノシシの動作が手にとるようにわかるのです。

「犬たちのなき声はしだいに殿さま杉の方向に向かっていく。源助じいは・・・しげみをすかしながらにやりとした。」

杉の大木のかげにかくれておれば、イノシシには気づかれることはないからです。

「三吉は、殿さま杉のかげに、身をひそめていた。・・・イノシシを待ちぶせしているのは、三吉だけである。やりそこなったら、もう、それっきりである。・・・責任が大きいのである。」

そう思うと・・・からだがぶるぶるとふるえた。・・・三吉はひどく緊張すると、くしゃみをするくせがあった。

「二回、三回と、がまんした。が

ときでした。

イノシシのするどい耳は、その音を聞きとったのです。

「このまま進んではあぶな

クシャン。ついにくしゃみをしてしまった」ちょうどイノシシが立ちどまって、あたりのようすをうかがっている

いぞと、イノシシは思い、そっとあともどりしはじめた」

かなたの木立ちの方から、三頭の犬が、かけてくるすがたをを見た。イノシシはしげみの中に逃げ込んだ。

・・・　・・・

イノシシがにげこむのを、源助じいのほかに、じっと見つめている、別のやつがいた。それは、　**「ぐっとめだつほど大きいイノシシであった。狩人からカガミジシとよばれているイノシシであった。」**

・・・・・・・

「・・・『お、お、お、こいつは三吉！えらいこったぞ。カガミジシだわ』と、源助じいは、やっとのことでいうのであった。」

カガミジシは、畑を掘り起こす、野菜をあらす、イネを食べるなど、さんざんにあらしまくる。頭がよく、悪がしこくて、おそろしく強いイノシシである。

からだは、松やにとどろの層に、光が反射して光って見えるから、狩人たちは、カガミジシというのである。

そのカガミジシの足あとを、源助じいはみつけたのである。

「めったにこない幸運である。源助じいは、二回、三回と、ふかぶかと、しずかに、ゆっくりと、息をすい、息をはいた。

犬も、三吉も、緊張して、その源助じいを、じっと見つめるのであった。」

あの時この時

公選法が改正され、選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられて五年余りが経過した。その五年間に行われた国政選挙における十八、十九歳の投票率は、低下の一途をたどっている。十月で衆議院議員の任期が満了となり、十一月には選挙が行われることになるが、若者の政治離れが投票行動として表れているのではないだろうか。

若者の政治離れを食い止める鍵は、中高生への主権者教育だと私は思う。社会との接点を増やして社会や政治への関心を高めるとともに、様々な考えが持てる社会的問題について考えさせることが大事だと思う。例えば、原発問題なら、政府や経済界の原発推進論と、原発事故で避難を強いられている避難者の現状や事故処理の難しさの両方を教え、両者を対比して仲間と議論するような学びが有効だと私は思う。

政権の言うことをやることは正しく、それを遵守することをよしとするきらいがある。社会的問題を扱うことは〝政治的中立〟に反することではない。政権の、あるいは反政権の一方の主張のみを教えることはまずいが、日々のニュースを見る目を養い、政治の裏を見抜く力を高めることが、若者の政治離れを食い止める切り札になると私は思う。（館長）

再生紙 シュールコート70K を使用しています。

運動公園草刈り
ご協力いただいている皆様に感謝

皆様にご利用いただいている運動公園ですが、駐車場や児童公園周辺など、定期的な草刈りが必要な個所が複数あります。

今年度以下の団体・個人の方がボランティアで運動公園周辺の草刈りを行ってくださいました。誠にありがとうございました。

○団体：（一社）パブリックサービス飯田事業所さん、（公社）飯田広域シルバー人材センター喬木支部さん

○個人：原　秀樹さん（両平）、下平俊雄さん（郭）

※右記の方以外でも教育委員会で把握できていない方々がいらっしゃるかもしれません。そのような方々を含め感謝申し上げます。

シルバー人材センター喬木支部の皆さんによる草刈の様子

喬木俳句会　長月句会詠草

伊那谷の大パノラマや秋の風　宮島　高枝

集ひ来て昔を偲ぶ里の秋

松茸の城分け入りし夫八十路　村山たか子

秋茜ステップダンス空広し

旅立ちぬ姉の面影おみなへし　田中　君子

雨の濡れ水引草の艶やかに

紺深く日を照り返す秋茄子　原　美恵

コロナ耐へ孫に会ひたし秋の雲

山寺の水音かすか彼岸花　秦　恭子

家族みな揃ひて和む長き夜

敗戦忌被爆の老女凛と立つ　西元くにこ

天竜を越へし別れや秋の蝉

音高きバイクの列や秋入日　市橋　ヨリ

遠目にも山は秋いろ日は射しぬ

少年のホルンの響きいわし雲　松葉　孝子

今日といふ一日の無事や秋夕焼

生き継ぎて横文字怖きデルタ株　吉川てる子

幾千里海の香纏ふアサギ蝶

語り継ぎたい昔話シリーズ
「たかぎの民話と伝説」喬木村教育委員会・編
『不動の滝』

伊那山脈の鬼面山と氏乗山に源を発して、大島と加々須の部落を経て、天竜川に注いでいる加々須川は、美しい渓谷をつくり、瀬戸の滝や獅子岩など、瀬戸八景として名高く、喬木村歌にも詠まれている。

昔は、木材を山奥から切り出して運ぶのに、川は大事な役目を果たしていた。

とくに江戸時代には、加々須や大島など、山の多いところでは、米の代わりに樽木（くれき）といって木材で年貢を納めた。

ところが、この樽木を納めるには、その苦労は大変なものだった。

当時は今と違って、物を運ぶには人の背か馬であった。したがって、木材のような重い物を運ぶには、川に頼るしかなかった。

加々須川のような小さな川では、雨で水かさが増してきた時を見計らって流すか、川をせき止めて水を溜めて、一度に堰を切って流すという、鉄砲という方法をとるしかなかった。

しかし鉄砲は堰を作るのに、大変な手間と費用がかかるので、雨で自然に水かさが増すのを待って、一斉に流すことが多かった。

そこで自然の雨に期待した人びとは、山奥から切り出した木材を、加々須川のへりまで運び出して置き、大雨が降って水かさの増してくるのを待った。

ある年のことだった。日照り続きで、加々須川の水も枯れて、切り出した木材は川べりに、山と積まれたままだった。

大島や加々須の人びとは、毎日空を眺めながら、雨の降るのを待ちわびていた。

よく、日照りの後には、その裏が来ると言われるように、空梅雨に終わるかと思っていたが、六月の末から降り出した雨は、ぼんを覆したような激しい雨となり、加々須川の水かさは、みるみるうちに増してきた。

待ちに待っていた村人たちは、今だとばかり川べりに積んで置いた木材を、一斉に川へと投げ込んだ。

木材は水を得た魚のように、加々須川の本流に乗って、川下へと勢いよく流れていった。

ところが瀬戸の滝まで来ると、勢いよく流れて来た木材が、どうしたことかピタリと止まってしまった。次からつぎと流れてくる木材で、狭い瀬戸の谷はたちまちいっぱいになってしまった。

人びとは、これは一体どうしたことかと、ただぼう然と立ちつくして、手のほどこしようもなく、眺めているだけだった。

するとその時である。一人の男が切り立ったような崖を、瀬戸の滝に向かって下りはじめた。

何をするんだろうと人びとは、かたずをのんで見ていると、下までおりた男は、ひょいと、堰止められている丸太の上へ飛び乗った。

そして、そそり立っている大岩の前に立ち、しばし合掌してから、岩に向かって鎚を振るいはじめた。

人びとの視線は、一斉にこの男に集まった。

男の打ち下ろす鎚音は、濁流の音に飲み込まれて、聞こえなかったが、一心不乱にほり続ける男に、人びとは引きつけられて、じっと見守っていた。

どれくらい時が過ぎただろうか、やがて男の打ち振るっていた鎚が止まった。

見ると、その岩には見事な字で、『不動明王』と刻み込まれていた。

すると、その時である。

今まで滝のところで止まっていた木材は、急に堰を切ったように、下流に向かってどっと流れ出した。

この時、集まっていた人びとは、思わず歓声をあげた。そして、『不動明王』と刻んだ男に向かって、一斉に拍手を送った。

今から、二百余年前のことであった。

今でも、『不動明王』と刻まれた字の下には、寛政元己酉年という字が、かすかに読み取れる。

それから以後、この滝を『不動の滝』と呼ぶようになり、村人たちは滝の傍らにお不動様を祀り、そのご利益を称えて、毎年お祭りをしている。

知って始める【SDGs】
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS（編集部）

「ごみから考える SDGs」

今回はごみについて考えてみましょう。

あの「浦島太郎」ならず、「プラ島太郎」のCMをご存知でしょうか。鯛やヒラメはゴミに絡まって踊れない！乙姫様のご馳走はプラゴミだらけ！もちろん玉手箱の中もプラゴミだらけ。「竜宮城はプラゴミだらけじゃ！」と浦島太郎が泣いています。

また保育園でも踊っている「もったいないばあさん」もご存知でしょうか。二歳になる孫が「もったいない音頭」を上手に踊って見せてくれます。図書館でも三冊も「もったいないばあさん」シリーズを借りて来ました。「食べ物を残すなんてもったいない。「ありがとうと感謝を持って食べようよ。」「いただきますとは命をいただくこと」と〝もったいないばあさん〟は言っています。

〈我が家のささやかな SDGs !!〉

その①　断捨離は思い切ってやらず、古い衣類やシーツ、タオルは母の介護のおしり拭きに四角く切って使う。ボロはたくさん必要です。

その②　衣類を手洗いして残った洗濯液はお風呂そうじに使う。（皮脂を落とす洗濯洗剤だからお風呂の湯あかにも効果あり！と私は思う。）

その③　昔から小さなビニール袋やパンの袋、なんでも袋は取っておく癖があり、冷蔵庫にパンの袋をぶらさげ、その中に細かいプラゴミ、ビニールゴミを入れ、大きな資源プラゴミの袋に捨てる。

その④　せっかく作った料理は、絶対無駄にせず、残った物は、次の日、また次の日、またまた次の日と私のお腹に治めるか、それでもどうしても残った物は、我が家の柴犬、テツが食べる。（ドッグフードに少しづつ細かくして混ぜる）

まだまだありますが、あとは恥ずかしくて書けません。皆さんで一緒にゴミを減らしましょう！

2 飢餓をゼロに

14 海の豊かさを守ろう

編集後記

秋の気配が濃くなり、暑さで落ちていた食欲も戻ってきた。今年は久しぶりの豊作と聞き、わくわくしているのが秋の味覚の代表「松茸」。ただ、感染症の影響で今年は松茸観光園の「大島山の家」は休園となっているのは残念だ。

しかし、市場には多くの松茸が並んでいる。とはいえそう簡単に口に入らないので、どこからかおすそ分けでもあったら嬉しいのに、と密かに思いながら、他の秋の味覚を存分に楽しんでいる。